



---

手をつなごう、子どもたちのころと

# ACC News Letter

危機の子どもたち・希望

December 2009

---



---

ACC ニュースレター第 23 号

ACC News Letter Vol.23

## 特集 ワークショップとは？

- ・ 心理ワークショップ…ACC の取り組み
    1. ACC と心理ワークショップの出会い
    2. 「遊び」という名の心理支援
    3. ワークショップに期待できること
    4. ワークショップの効果
  - ・ ワークショップ具体例
  - ・ 交流ワークショップの情景
  - ・ その他報告
-



## 心理ワークショップ - ACC の取り組み

松永 知恵子

### ACC と心理ワークショップの出会い

2001年、旧ユーゴスラビアの内戦で心に傷を負った難民の子どもたちを対象に、クロアチアの難民センターで個別的心理療法を中心に活動を始めた私たちACCは、活動を進めるにつれて次のようなことに気づき始めました。表面的には症状を呈していない人たちの中にも心が深く傷ついている人々がいること、そうした人々は専門的治療に躊躇しがちであること、また支援の対象になりにくい地元民の中にも心理的サポートを必要としている人々が多く存在することなどです。そしてこれらの人々が必要としているのは必ずしも専門家による治療的援助ではなく、内戦によって分断された人間関係、コミュニティ、傷ついた自尊感情の再生など、人間が人間らしく生きて行くための心理社会的な環境の構築であり、そうした切なる願いが人々との関わりの中で

感じ取られてきたのです。

こうした状況の中で出会ったのが、現在ACCの姉妹団体として協働関係にあるセルビア共和国の心理社会支援専門NGO、「Zdravo da ste」(以下ZDS)でした。ZDSはベオグラード大学の発達心理学者ベスナ・オグニュービッチ女史を中心に、旧ユーゴ紛争勃発直後の1992年以来活動している団体で、その活動の支柱は心理ワークショップでした。

内戦が始まって間もなくの頃、幼稚園の子どもたちが描く絵に多くの黒い花を見いだしたことが契機となって活動を開始したZDSは、難民センターだけでなく、難民やロマ人など少数民族も地元民と共に通う学校、児童養護施設、障害児のための特殊教育校などで、一貫して心理ワークショップを行っています。

### 「遊び」という名の心理支援

ZDSの心理ワークショップの中心概念は「遊び」です。ベスナは、旧ソ連の発達心理学者レフ・ヴィゴツキーの理論を引用して、子どもと遊びの関係を次のように述べています。

「子どもは遊びのファンタジーの世界で実年齢よりも1-2歳上の世界を体験し、その精神空間こそが子どもが健やかで柔軟な心の成長を遂げていくために不可欠なものなのだ」

戦争などの危機的状況下では、ファンタジーが子どもの心の世界から奪われていき、戦争ごっこや暗い色使いの絵など、遊びと危機的な日常生活が直結してしまうのです。「遊び」が奪われた日常性の中にある子どもたちに、「遊びの枠」を外側から持ち込むことで、生きる力、生き抜く力を子どもたち自らが育むことを目指して、ZDSは心理ワークショップを中心とした心理支援を始めたのでした。

「遊び」の心理学的意味について、アイデンティティの概念で有名な心理学者E・エリクソンは、「遊びは生まれ変わる性質、成長しつつある能力を持ち、何よりも遊びそのものに治癒力がある」と述べています。また、ト

ラウマ研究の第一人者ヴァン・デア・コルクも、子ども時代の遊びについて、子どもが違った役割やその結果を試すことを可能にする意味で重要であり、遊びによって他者の世界を理解できるようになる、そして遊びが少なくなることによって、ポジティブなこととネガティブなことの統合能力の発達が制御されると指摘しています。

臨床心理士の弘中正美は、「遊びは子どもにとって表現すること、体験することが渾然一体となった」、そして「言葉にならない、無意識の中に隠れている様々な感情を適切に表現できるかけがえのない」心的活動であると述べています。

このように、子どもにとって「遊び」とは、生きていくことそのものだといえるでしょう。心理ワークショップには「遊びの枠組み」の中で感じたことを、描画、言葉、身体の動きなどで表現するプロセスが必ず最後にあります。理屈ではなく五感、感性で感じ取った、心の内に自然に湧き上がる「何か」を表現することは、まさに「遊び」という心的活動に不可欠なものなのです。



### ワークショップに期待できること

このような見地に基づき、ACCは、PTSD（心的外傷後ストレス障害）対処法というメイン・ストリームの心理支援概念には取敢えず、焦点をあてず、個別的心理療法へのオルタナティブな方法論として、心理ワークショップを取り入れたプログラムを活動の中心に据えることにしました。

現在、セルビア共和国でのZDSとのジョイント・プログラムは勿論の事、日本国内の平和学習や児童養護施設での活動、またカンボジアでも、心理ワークショップを大きく取り入れています。この選択には、「遊び」の持つ心理学的な意味に加え、次のような点も大きな理由となりました。

#### 1) ラベリングの回避

通常の心理療法では、「患者」対「治療者」という図式が固定化し、そこでは「患者」の役割に押し込められてしまいがちになります。ラベリングは、「大人」対「子ども」、「難民」対「非難民」の構図も生みやすく、被援助者が持っている潜在的な能力を引き出す可能性を閉じる危険があります。グループワークでもある心理ワークショップで、難民と地元民が共に参加しやすい学校という場での実施を重視したり、参加者も子どもだけではなく教師、家族など大人、老人も共に参加できるように工夫するのはこの視点に立っての事です。

#### 2) 関係性の構築

それまでの人間関係を含む社会活動の、突然の断絶を余儀なくされた難民は、避難先で

新たな関係性の構築を始めなければなりません。特に子どもや若年層にとって、この突然の断絶は、未来に向けての人間関係の構築とその継続性への信頼感に著しい影響を与えているとされます。ワークショップを集団で、しかも継続的に行うことによって、そこで培われる関係性が、この負の遺産を克服するよすがとなることが期待されます。

#### 3) 創造性の発達

ワークショップには、描画、音楽、詩、ダンスなどアートが非常に大きなモチーフとなります。象徴的な表現活動を通して、理性による観念的な納得ではなく、感性による「実感」で子どもたちが創造性を養うこと、そしてそのような表現を媒体とした自己治癒の効果が見込めます。

#### 4) 予防的効果

現在何らかの症状を呈していなくとも、難民となった子どもたちの家族もまた重度のストレスを受けていることは明らかです。心理療法と異なり、「遊び」の要素を色濃く持つワークショップには、社会通念的、また心理的な「入りやすさ」があり、心理的障害の予防的効果が見込めます。心理ワークショップは、単に子どもが「遊び」を取り戻す場であるだけではなく、ストレスフルな日常を送る子どもたちの家族、保護者としての「大人」もまた、「遊び心」を子どもたちと共に取り戻す場でもある点が重要なのです。

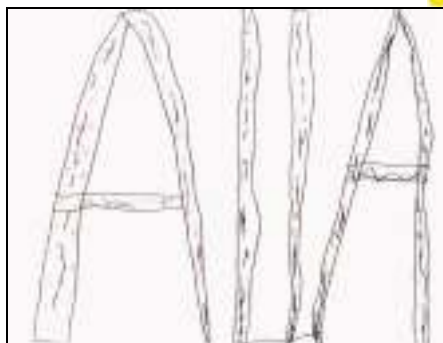
---

### ワークショップの効果

ZDSから多くを学んだACCのワークショップは、「遊びの枠組み」の中で、毎回何らかのテーマを設定してデザインされています。例えば「名前」や「手のひら」、「大きな木」など、いずれも自己肯定感や自尊感情を育み、かけがえのない自己の存在確認につながるよう、そして自分は他の人々と共に、それぞれが大切な一部として全体を構成していることを確認できるような方向性持つことと、それこそがワークショップの重要な概念となっています。

次に出てくる絵は、セルビア共和国でZDS

が定期的に「名前のワークショップ」を実施した作品例です。9歳の男子ですが、ワークショップ開始時点では用紙の隅に小さく書いていた自分の名前を、数か月後にはこのように真中に大きく書くようになりました。紙面の都合で、他の同様の例をご紹介できないのが残念ですが、ワークショップへの参加を通じ、この子どもの心に起きた大きな変化が読み取れます。ファシリテーターによって見守られながら、子どもは自由に感情を表現し、それが認められ、受け入れられる大切な体験を持つのです。



このワークショップ、「遊び」の大切さは、前述した難民の子どもたちだけではなく、実は大人にとっても意味あるものだと思います。人生の苦しみや悲しみを味わい、或いは既成概念に縛られてたくさんの鎧を着てしまった私たち大人が心をほだき、「遊び心」という躍動感や創造性、さらには人間同士の結びつきに対する信頼感を回復するきっかけになるのではないのでしょうか。もうひとつ忘れてはならないのは、豊かといわれる日本の子どもたちもまた、昨今の社会で起きている事象を考えるにつけ、その心の成長のためにワークショップがもたらす素朴な「遊びの世界」を必要としていることです。

ACC が日本国内の小中学校や児童養護施設

(参考文献)

遊戯療法の研究 (日本遊戯療法研究会、2000 誠信書房)

トラウマティック・ストレス (ベセル・ヴァン・デア・コルク他、2001 誠信書房)

Evaluation (Vesna Ognjenovic et al., 2003 Zdravo da ste)

設で展開するワークショップは平和学習を視野に入れたものです。通常、言葉による説明・授業が主流の平和学習にワークショップを取り入れるのは日本の子どもたちに本来の「遊び」の世界と共に、自分の日常性とは直接関係のない「彼方」に思いをはせること、人間同士の絆の普遍性、そして多様性の受容を、単に知識だけではなく少しでも自らの内に備わっている感性の次元で「平和」を感じ取ってもらいたいという視点にたつてのことです。

ACCはこれからも、私たちの心理ワークショップとその基本的考え方を大切に、そしてその成長に向かって努力していきたいと考えています。

## ワークショップ具体例

### ☆ 手のひらのワークショップ

- 心の握手～手のひらに手のひらを重ねて
- 紙の上に自分の手のひらをペンでかたどります。そして「日々、手を使ってどんな仕事をしたか」「手を通してどんな出会いがあったか」…などと、まずは自らの手のひらに思いをはせます。その後、となりの人と紙を交換し、紙になぞられた手のひらに自分の手のひらを重ね、新たに描きます。これを繰り返すと、何人もの人と手を重ね合わせたように見えます。まさに、「紙の上での出会い」が成立するのです。これだけでも人とのつながりを実感できるでしょう。



これは、初めてワークショップを体験する方を対象によく行っています。実際に体験した方からは「普段自分の手をじっくり見つめることがないので新鮮だった」との感想をいただきました。



☆ 木のワークショップ (2005年5月、カトリック碑文谷教会日曜学校)

■ 「いのち」「こころ」「あした」「しあわせ」～明日への希望

■ まず、色画用紙を葉っぱの形にちぎります。色画用紙にはあらかじめ、「いのち」「こころ」「あした」「しあわせ」のうちいずれかの言葉が記されています。これらは子どもたちが元気に暮らしていく上で欠かすことのできない要素であり、コソボ紛争で傷ついた子どもたちの現状を通して私たちが気づかされたことでもありました。これらのキーワードを通し、どうすればみんなが明日への希望を持って楽しく過ごせるようになるかを考えながら、自由に絵で表現しました。



最後に、幹と枝が描かれた大きな模造紙に葉っぱを貼り、一本の木を作りました。コソボの子どもたちの心にもこの木が育ちますように、との願いを込めて……

☆ 太陽のワークショップ (2005年10月、江戸川区立第二葛西小学校)

■ 「同じ太陽の下で」～遠く離れていても、みな同じ太陽の下で暮らす仲間

■ 光をかたどった色画用紙に記された太陽にちなんだキーワード「あたたかさ」「光」「遊び」「明日」から想像をふくらませ、自由に絵を描きます。



友達と遊ぶ様子やお花、好きなアニメのキャラクターなど、表現した絵はさまざま。みんなの作品を大きな模造紙に貼り、さんさんと光輝く太陽が完成。最後には出来上がった太陽を全員で囲み、大きな声で「同じ太陽の下で!」と思いを込めてワークショップを締めくくりました。

紛争で傷ついたコソボの子どもたちの存在を日本の子どもたちに少しでも身近に感じてもらうと同時に、コソボの子どもたちも毎日見ている太陽を通じてメッセージを届けるべく行いました。

☆ ハートのワークショップ (2006年11月、江戸川区立第二葛西小学校)

■ わたしたちの気持ち～違いを受け入れる意味

■ セルビアで使う「キリル文字」で書かれた7つの感情表現の言葉(楽しい、悲しい、嬉しい、悔しい、優しい、怒っている、安心している)のいずれかが記されたカードを配り、ハートをかたどった色画用紙に「どんな時にその気持ちになるか」と「どんな時にそうではない気持ちになるか」について絵や言葉で表現。各感情にまつわるエピソードについて発表した後、たくさんのハートを寄せ集めて一つの作品にまとめました。

異質な存在を排除することにより生じた悲劇の歴史を繰り返さないためにも、まず



は自分の中に芽生える多くの感情と向き合った上で、他人との違いを受け入れることの意味を考えてほしい——との思いを込めました。



☆ 列車のワークショップ (2009年1月、児童養護施設クリスマス・ヴィレッジ)

■ 私たちの思いよ、届け～コソボ行き列車

■ 車両をかたどった色画用紙にコソボの子どもたちへの想いを込め、自由に絵を描きました。中にはコソボの子に読んでもらえるようにと、アルファベットで自分の名前を書く子もいました。その後、歌に合わせてじゃんけんをして、負けた人が勝った人の後ろについて移動するという「じゃんけん列車」ゲームの時間に。最終的に一列になった時点でとなり同士の絵を糸でつなぎ、一本の長い列車を作りました。

「クリスマス・ヴィレッジ発コソボ行き列車、出発しま～す!!!」。ワークショップ

の最後には完成した列車をみなで持ち上げ、コソボへの出発をイメージしながら「シュッシュポッポッ～」の号令にあわせてぐるぐると回りました。



---

## 「交流ワークショップ」の情景

---

### 【東調布第一小学校にて】

2007年2月東京都大田区立東調布第一小学校にて、総合学習の時間を頂き授業を行った。



『自分で一歩踏み出し、さまざまな新しいものに出会うことで、視野は広がっていく。しかし、新しい世界に物理的な一歩を踏み出したとしても、そこで出会う未知の人々に先入観を持って接していたら新しい世界は広がらない。新しい世界で初めて出会う「異質なものを」をこわがらずに「認め、受け入れる」ことで、真の意味で世界がひろがっていくのではないだろうか』——こんなコンセプトの

### 【イエフィミア孤児院にて】

空中に見えないペンで絵を書き始めたヤスミナ。それに続くように、子どもたちもみな空中に絵を書き始めた。今まで騒々しかった数十人の子どもたちが、一人また一人とヤス

もと、「ぼくらの足跡 ～一歩踏み出せば、世界はひろがる～」というWSを行った。

まず、色画用紙に自分の足型を写し切り取ってもらう。足型を取るのがくすぐったいのか、皆とても楽しそう。切り取った足型に「みんなの行きたい場所」を自由に描いてもらい、ACCが用意した地図へ貼っていった。おばあちゃんの家を描く子、エジプトのピラミッドを描く子。また、WSの前にコソボの話をしたので、コソボと書く子。子どもたち一人ひとりの夢や想いがつまった足跡が、ひとつまたひとつと地図に増えていく。全員の足跡で埋め尽くされた地図は、なんとも言えない素晴らしいものになっていた。セルビアへ送られるその地図を、子どもたちは感慨深そうに見つめていた。「お姉さん、これ本当にセルビアに届くの？」1人の女の子が私に尋ねた。そう、彼らの残した足跡を、今度は私たちがセルビアへつなぐ。

ミナに続く。ヤスミナは決して「空中に絵を書きましょう」とか「私の真似をして」とは言わない。子どもたちはあくまで自然に彼女に続く。まるで魔法にかかったかのように。



印象的なセルビアでのWS導入シーンだった。ヤスミナは、ACCの姉妹団体であるZDSのメンバーの一人である。2007年のセルビアへのスタディーツアーにてイエフィミア孤児院を訪問した際、彼女がリードするWSを体験した。

イエフィミア孤児院では、ACCが東調布第一小学校で制作した作品（地図）を使用したWSを行った。これから何かが始まるというワクワク感からか、まとまりのなかった孤児院の子どもたちは、ヤスミナの見えないペンの導入からWSに引き込まれていく。「今日は日本から、みなさんにすてきな贈り物が届いています。」と、私たちが持参した日本の子どもたちの作品をとりだすヤスミナ。作品を触ってみる子、描かれた絵をみて友達と笑う子。子どもたちは、遠くはなれた日本の子どもたちから届いた元気いっぱいの作品を、ものめずらしそうに見つめている。「このすてきな贈り物をみんなで“感じ”ましょう」と、大きな模造紙にかかれた地図を持ち上げるようヤスミナが提案する。



作品の下に入るような形で地図を持ち上げ、部屋の中を歩き回った。あまり広くはない部

屋の中で、作品の下を通ったり、すれ違いざまにハイタッチをしながら移動する子がいたり、歌を歌う子がいたり、皆思い思いに日本からの作品を“感じ”ていた。それは、ただ壁に貼られた作品を眺めているのとはまったく違う。LOOKでなくて、FEEL。

そうやって日本からの作品を感じてもらった後、今度は孤児院の子どもたちにも絵を描いてもらった。日本からの作品を床に置き、その上で色画用紙に絵を描く。日本の子どもの絵をそのまま写す子や、セルビア語でメッセージを書く子。日本の子どもたちへのお返しに描かれた新たな絵を、また地図の上に貼り付けていく。日本の子どもとセルビアの子どもとのコラボレーション作品の出来上がり！

「国際交流」というと大げさかもしれないが、作品を通して日本の子どもたちとセルビアの子どもたちは、確かに交わっていたと思う。時間や距離を越えて。

私は日本で作品を作った際はWSをする側であったが、セルビアにきて今度はその作品を使ったWSを受ける側であった。そうすると不思議なことに、見慣れた作品がまた違ったもののように感じてくるのである。きっと新たな場所で新たなWS空間が作り上げられていたからだろう。

私たちのWSとは、ただ単に作品を作ることが目的ではない。「WSに参加する人が楽しく居心地の良い時間を過ごせる、そんな空間をつくりあげること。」これからも、その気持ちを大切にしていきたい。

---

## ほうこく・いろ・いろ

---

### 子どもたちのパワーが爆発!?—「風の船」in サレジオ教会日曜学校

10月4日(日)、3年ぶりにカトリック碑文谷教会(サレジオ教会)の日曜学校で、「風の船」ワークショップを行いました。当日、日曜学校には1年生から6年生までの約100名の子どもたちが来ていて、会場であるサレジオ幼稚園講堂の中は、子どもたちの熱気が溢れていました。日曜学校のリーダーが子どもたちを上手に落ち着かせて、いよいよ「風の船」の出航です。

まず、パワーポイントを使って、ボスニア紛争についての簡単なレクチャーを行いました。すでに終結から15年以上の歳月が流れたこの紛争のことは、人々の記憶から消え去ろうとしています。日本の子どものためには自分の生まれる前のこと。それでも、戦争で傷ついた人々、燃え盛る我が家、絶望に打ちひしがれた人々、画面に映し出される「悲しみ」と「苦しみ」に、多くの子どもたちが、



心を打たれていたようでした。

続いて画面には、ノヴォ・ゴラジュデ初等学校の子どもたちの様子が映し出されます。過去の紛争の負の遺産を背負って生きている子どもたち、自分たちのアイデンティティを守ろうと民族舞踊の練習に励んでいるその一生懸命な姿から、日本で恵まれた生活をしている子どもたちは何を感じとってくれたのでしょうか。

後半はいよいよワークショップ。今回は、今年3月にACCメンバーが訪れたボスニア・ヘルツェゴビナのノヴォ・ゴラジュデ初等学校でのワークショップ作品を装飾したカードを作り、それを使ってのワークショップです。いくつかのグループに分かれて、Young Hopesメンバーが準備したカードに、今日知ったボスニア紛争やノヴォ・ゴラジュデの子どもたちのことに心を寄せて絵を描いていきます。何を描くか思い浮かばない子、絵を描くことを忘れて友だちとふざけあう子もいますが、リーダーやACCメンバーが声掛けをし、

子どもたちの心を開き、思い思いの作品を仕上げていきました。

早く描き終った子どもたちが、リーダーの指導で『フレンド』という友だちへの思いを歌った曲を歌い始めました。写真とビデオを通じて知ったノヴォ・ゴラジュデの友だちのことを思いながら、ボスニアという国のことを思いながら…。胸に響く澄んだ歌声でした。

完成した子どもたち一人ひとりの思いが描かれた100通のカードには、最後に心をこめてセルビア語で「ともだち」という言葉を掛けました。この子ども達の声や、「風の船」に乗せて、ボスニアの子どもたちに届けたいと思います。

今回の「風の船」にご協力を頂いたカトリック碑文谷教会日曜学校関係者の皆さま、そして、初めてワークショップ・ボランティアに参加して下さったミックス氏、えりさんご夫妻に心からの感謝を捧げたいと思います。本当に有難うございました。

---

## 女子美祭で「おばあさんの手」グッズを販売しました

10月24、25日の2日間開かれた女子美術大学の学園祭で、「おばあさんの手」関連グッズを販売していただきました。今回ご協力いただいたのは、アートを通して国際交流にかかわりたいと考える有志の女子美大生。会場では、グッズをご購入いただいた方の写真を

撮り、おばあさんへのメッセージと併せて模造紙に貼っていただきました。これは、来年のスタディーツアーでおばあさん方に届ける予定です。ご協力いただいた皆さまに心よりお礼申し上げます。

---

## カンボジアでお米支援を実施しました

前々回のニュースレターでお知らせ致しました、昨年の多雨による米収穫量激減のため、食糧危機に陥っているパンテアイミンチュエイ州パイレン地区に対する米支援の様子を伝える写真が、現地パートナーNGOであるCOFから届きました。支援用の3tの米は、国境で



の緊張状態のあおりでタイへの米の販路を失い、経済的に困窮している村から購入したものです。

都市部の復興から取り残され、貧困のために栄養状態に問題のある子どもたちが多いこの地区への米の緊急支援は、「ともだち未来便」の一環として実施したのですが、今回だけで終わらせることなく、子どもたちや身寄りのない高齢者への米支援を、少しでも継続していきたいとの思いを深めております。皆さまの温かいご理解とご支援を心よりお願い申し上げます。





## 速報 教科書、ミシンが届いた!!ー “ともだち未来便 2009”

ACC では、本年度「ひろしま祈りの石国際教育交流財団」から頂戴した助成金を、より有効に活用するため、カンボジアの小学校の新学期がスタートする 10 月に、教科書等の前倒し支援をすべく、現地パートナーNGO の COF との協議を重ねて参りましたが、先日、その支援活動が無事終了した旨、COF より報告がありました。



遠い日本から届いた「温かい応援」が、カンボジア貧困地区の子どもたち、そしてコミュニティの方々の生活環境を改善し、未来に向けての「希望」に繋がることと確信しております。

ノート&教科書	ワット・パデマコ小学校	カンダル州
	トロパン・トゥモール小学校	コンボンチュナン州
	プレイ・トゥルテン小学校	バンテアイミンチュエイ州
ミシン	ワット・パデマコ小学校	カンダル州
	トゥール・ポンゴロ村	コンボンチュナン州
	ケオ・ムリ村	プルサット州
	ソムサン村	バタンバン州
米※	トゥール・ポンゴロ村	コンボンチュナン州
	ソムサン村	バタンバン州

※ 今夏カンボジアでは台風による稲作への影響が甚大だったことから、被害が深刻な上記の地区には、ミシンと一緒に米の支援も実施しました。

### ACC ホームページのご案内

ACC が行うプログラムごとの紹介や活動の近況報告、ACC メンバーによるエッセイなどを掲載しています。ぜひご覧下さい。( <http://www.acc-japan.jp/> )

ACC の若手メンバー・Young Hopes によるブログも更新中です。ACC での活動や日々の生活を通して感じることなど、メンバーの素顔がのぞけるページとなっております。ACC のトップページからも見ることができます。あわせてチェックしてみてください。

<http://younghopes.exblog.jp/i2/>



ご協力をお待ち申し上げます

会員として、継続的な支援ネットワークにご協力下さい。

個人会員	年会費	10,000
学生会員	年会費	2,000
子ども会員	年会費	1,000
法人会員	年会費	30,000 (円)

送り先

● 三菱東京 UFJ 銀行 恵比寿支店  
普通口座番号 1610158  
口座名 特定非営利活動法人  
危機の子どもたち・希望

● 郵便振替  
口座番号 00180-0-69004  
口座名 危機の子どもたち・希望

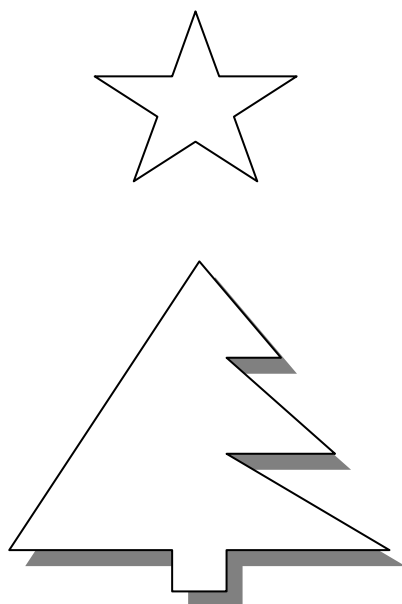
編集後記

今回の「ワークショップ特集」いかがでしたでしょうか。

世間ではいろいろなワークショップが行われていますけれど、ACCに出会うまで、私にとってワークショップは身近なものではありませんでした。一つひとつの経験を積み重ねる中で、さまざまな出会いを通じて、ワークショップがだんだん身近になってきたように思います。

皆さまも、何か機会がありましたら、ACCのワークショップに参加してみてください。きっと新たな自分に出会えることと思います。

(高橋 喜美子)



特定非営利活動法人  
ACC 危機の子どもたち・希望  
〒152-0031  
東京都目黒区中根 2-12-1  
K&K ビル 5F  
TEL/Fax 03-6459-5971  
E-mail forhope@tkk.att.ne.jp  
ホームページ <http://www.acc-japan.jp/>